

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：13201

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25590276

研究課題名(和文) 問題例の評価から始める発展的なコミュニケーションスキル指導法の研究

研究課題名(英文) The Creation of Communication Skills Teaching Methods to Evaluate the Problem Conversation Cases

研究代表者

宮城 信 (MIYAGI, SHIN)

富山大学・人間発達科学部・准教授

研究者番号：20534134

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近年話題となっているプレゼン能力やディベート能力をの基礎となる実生活の場での「日常の場でのコミュニケーションスキル」教育についての実践的研究である。この能力は、謝絶・謝罪、激励、勧誘等の場面で必要となる会話の技術である。この能力を育成する指導法と教材の開発のために、高校や大学での実践を積み重ねた。研究成果として、現場で活用できる教材として全15回の課題と振り返りノートを作成し、併せて実践記録を示すと共に、効果的な指導法の提案を行った。

研究成果の概要(英文)：Communication skills education is currently a hot topic. This study is not about presentation or debate skills but practical research to learn “communication skills in life”, for example, the skills of “denial”, “apology”, “encouragement”, and “solicitation”. This teaching method has been practiced several times in high school and college classes; consequently, we created 15 units of text and review notes suitable for use in college classes. In addition, the practice record shows that we have proposed an effective teaching method.

研究分野：現代日本語文法、意味論、語彙論、国語科教育

キーワード：コミュニケーションスキル教育 日常のコミュニケーション 国語科教育 教材開発 実践記録

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、学生の説明力・表現力の指導法を研究してきた(宮城 2009, 2010)。その過程で、近年プレゼン能力やディベート能力を基礎とした公的な場でのコミュニケーション力ばかり求められるが、実生活の場では日常の場でのコミュニケーションスキルが必要であり、それが先の公的な場でのコミュニケーション力を支えていることに気づいた。そしてこの能力の研鑽が必要であると痛感した。これは、例えば、謝絶・謝罪、激励、勧誘等の場面で必要となる会話の技術を意味する。先行研究には、様式の考察(森山 1990, 国立国語研究所 2006)や外国人日本語学習者を対象とした種々の調査等が見られるが、日本人ならこれらの行為が上手にできて当然だといった先入観があり、その育成は等閑視されてきた(森・牛頭 2010 の刊行は先駆的な試みである)。この状況を受けて、日常の生活を円滑に行うためのコミュニケーションスキルの効果的な指導法と教材の開発が急務であると考えた。またその指導法は、大学を含めた複数の教育機関で実践可能であることも重要な条件である。中学・高校卒業後就職する学生、大学・大学院卒業後就職する学生の違いはあるがいずれも当該機関でのコミュニケーション力育成教育が、社会で生きる力を涵養できる事実上最後のチャンスとなるからである。この問題は根深く、「これまで国語の授業でどのようにコミュニケーションの技術について学んできたか」という質問に対して、「ほとんど記憶にない」(45人中 26人 58%)、「ディスカッションをやったことがある」(同 14人 31%)「意見発表の指導を受けたことがある」(同 4人 9%)「そもそもどのようなことを学ぶのか分からない」(同 6人 13%)等の回答がよせられている現状にも注視しておく必要がある。

2. 研究の目的

コミュニケーション力は、基礎段階での語彙を中心としたものから、公的な場における運用まで、次の図1のように階層的な連続体を成していると考えられる。

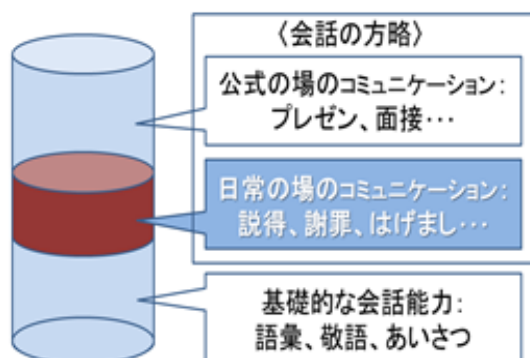


図1 コミュニケーション力の階層図
(宮城 2013 より抜粋)

上図3層の関係を概説すると、まず「基礎的

な会話能力」は、会話での挨拶等の形式的な受け答えや、敬語や伝えたいことを表現できるだけの基礎的な語彙力を指す。次に「公的なコミュニケーション力」は、公的な場でのプレゼン(テーション)やディスカッション、就職試験の面接等での受け答えを円滑に行うことができる能力である。最後に、本研究で育成を目指している「日常のコミュニケーション力」であるが、本研究では、前者の知識を後者に活用するための力と捉えている。すなわち、聞き手の気持ちや立場に配慮した適切な発言(ある意味では方略的な発言)ができる能力である。この能力が生かされるのは、謝ったり、頼みごとをしたりする、まさに日常の生活の場で、正確に伝わったかどうかはもちろんのこと、聞き手が話し手の発言をどのように受け止めたのかを推察できることが重要になる。聞き手に対する配慮が不足していると、思いの外結果が不調に終わることがある。理詰めで説明しても聞き手を説得できるとは限らない。さらに、実際のコミュニケーションの場面では、声のトーンや身振り等にも気をつけることが要求される。「聞き手の心を動かす伝え方について考える」ことが日常のコミュニケーション力の本質である。本研究ではその力を裏支えている会話技術を「日常のコミュニケーションスキル」と位置づけている。

本研究では次の(1)~(3)を達成目標とする。

(1) 学生の日常の場でのコミュニケーションの方略の実態を明らかにする

日常の場のコミュニケーション演習を記録し、文字化して演習の各段階での学生の方略の実態調査を行う。彼らのコミュニケーションの方略を解析することが本研究の基盤となる。また、どのような方略が彼らにとって説得力を持つのかを検証することも眼目の一つとなる。

(2) 問題例を評価する学習法を提案する

前項の実例を参考に学生自身が遭遇する日常で起こる様々な不都合な場面を教材化する。その演習で熟考した結果が問題解決に援用できるという需要に答える教材とする。

(3) 多校種での比較実践を行い汎用性の高い指導法を開発・発信する

本研究で提案する指導法を高校・高専・大学等多校種で実践して評価する。その結果を受けて効果を検証しながら、実用性を向上させるための改訂を行う。最終的に指導法・教材集として公開・発信していく。

日常の場のコミュニケーションを取り上げた教材・指導法はまだまだ黎明期にあり、教育現場からの要求が高い。以上のような研究活動を通して、日常的に起こりうる不都合な場面において対処できる方略の効果的な指導法が確立を目指す。それを基礎として発展的技術である公的な場でのコミュニケーションスキルへの発展や、国語教育の現場に於けるコミュニケーションスキル教育への具体的な提案を目指す。

3. 研究の方法

(1) 問題を含む会話例から考える効果的な会話の方略

これまでのコミュニケーションスキル教育教材では、まず状況を与え、それに沿って演習を行うという流れであることが多い。この手法では、学生の回答が似通った内容になり、新しい表現や会話の方略を発見することが難しい。そこで本研究では、学生個々が「問題を含む会話例」を話し合いを通じて相互に評価し、問題点を整理しながら、自分の話し方を省みて方略を再構築して実践するという段階的な指導法の提案を行う。個々の活動に〈観察→熟考→発見→改善〉という一連のプロセスが生まれ、創造的に問題を解消することができるようになる。

(2) 話すことから始める自己表現

現在の国語表現の授業の多くは文章表現中心に行われており、口頭表現は自己紹介やプレゼン演習等に留まる。本教材では、学生たちが学校生活や日常生活で多く直面する問題(例えば、誰かを励ます場面等)を取り上げる。演習で挑戦した内容がそのまま生活の問題解決に応用できる点は極めて斬新な特徴である。多くの学生にとって、皆の前で話すことの抵抗感は意外にない。むしろ機会を得たいと思う者も多い。ただし、この段階では自己顕示欲が主な動機であり、相手を説得するために話すという目的意識は薄いので本研究で提案する課題に段階的に取り組むことによって、自ずと相手意識が芽生え、目的に応じた方略を選択できるようにする。

(3) 校種を問わず実践できる指導法モデルの構築

研究代表者の過去3年来の実践に加えて、単位制高校を協力校として実践を積み重ね、多様な教材の開発や指導法の汎用性を検証していく。大学や高専、単位制高校とでは、卒業後社会の即戦力と期待される人材を育成する点では共通しているが、価値観のまったく異なる学生が在籍している。一方で、日常の場のコミュニケーションの問題意識の有無には差異は少ない。他校種で無理なく運用できる指導法が確立できれば、極めて汎用性の高いコミュニケーション教材・指導法が実現する。

4. 研究成果

(1) 高校・大学における日常のコミュニケーションスキル教育の意義

高校の国語・大学の初等教育の授業等で、日常のコミュニケーションスキル教育を行うことには、次のような意義が認められる。

a. 日本語を見直す

多くの学生は、これまでの学校教育の中でコミュニケーションスキルを含め言葉の使い方や伝え方について深く考える機会が少なかった。本実践を通して、コミュニケーシ

ョンのあり方はもちろんのこと、母語である日本語そのものを見つめ直す契機を得ることができる。

b. 実践的なスキルを身に付ける

これまで、学生たちは様々な経験をしてきているので、コミュニケーションの失敗や必要性を実感したことがあり、自分の経験を踏まえて具体例をあげ、議論をすることができる。また、部活動の指導者や学園祭実行委会等責任ある立場で、習得したスキルを実践で磨くことができる。

c. 学術的な視点から考える

高校までの言語教材や言語単元と異なり、コミュニケーションスキル教育を主題に据えることによって、独立した科目として十分な時間を確保することができ、知識や技術を学術的に分析し、体系的に学習することができる。

d. 「生きる力」を身に付ける

多くの者にとって、大学は社会に出て行く学習の最終段階である。この段階で社会生活に適応するための十分なコミュニケーション力を身につける必要性(学習の必然性)がある。また本実践における自らのコミュニケーションのあり方を内省する経験は、学生たちの自ら学び考える力の育成に資することが期待される。

(2) 日常のコミュニケーションスキルテキストの概要

a. 本教材各回の課題

本研究の課題(大学生向け)は、全15回で構成され、演習形式の授業として、以下のように配置される。

第I部

- 第1回 ガイダンス/自己紹介をする
- 第2回 説明する
- 第3回 紹介する
- 第4回 報告する
- 第5回 質問する

第II部

- 第6回 雑談する
- 第7回 話し合う
- 第8回 謝る・感謝する
- 第9回 励ます・アドバイスする
- 第10回 勧める・誘う
- 第11回 頼む
- 第12回 断る
- 第13回 意見を述べる・忠告する
- 第14回 説得する
- 第15回 面接を受ける

(2015改訂版)

b. 教材(学習プリント)の構成

本実践では、各回下図2のようなB4版両面印刷の課題プリントが用意される。

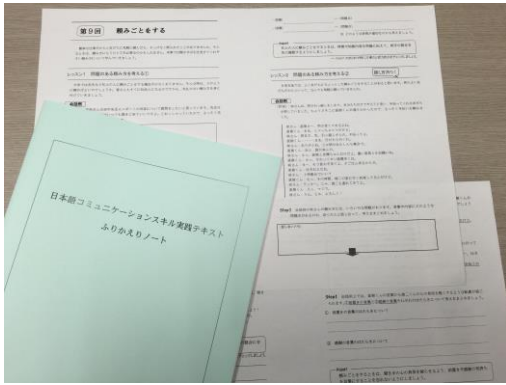


図2 課題プリントと「ふりかえりノート」

内容は問題のある会話例を題材としたレッスン課題3題(個人課題とグループ課題)、ロールプレイ演習課題、コラム等で構成されている。学習者は教材の会話例のどこに問題があり、コミュニケーションスキルの観点からどのように修正すべきかを討議していくことになる。対処方法は、場面や相手によっても異なってくるので、本課題の眼目は唯一絶対の正解を見つけることではなく、避けるべき発話を検討し、意識的に停滞なく会話を進めていくように心掛け、会話の方略等の言語交流意識を持つことにある。

(3) 日常のコミュニケーションスキル教育の
応用的研究：高校実践編

a. 高校生用教材の概要

まず、高校生用教材である「伝わる願いを考える」「自分が手伝うことを勝手に決められてしまったときの対応」の概要を示す。

○次の会話例を聞いて、考えてみましょう。

【状況】アキラくんは、友だちのユミさんに手伝いをたのまれました。1人だと大変なので、勝手にケイクくんも手伝いに行くと約束して、アキラくんがそれをケイクんに伝えます。

[会話例]

アキラくん：あっ、ケイ。ちょうどよかった。
明日、ユミの荷物運びを手伝うことになってさ。

ケイクくん：えっ、明日一緒に僕の家でゲームするって約束したじゃん。

アキラくん：だからさー、2人でやればすぐに終わるだろ。手伝いに行こう。

ケイクくん：えー聞いてないよ。なんで僕もやることになってるの。

アキラくん：その場のノリで、そうなっちゃったんだ。ユミに頼まれたら、ケイも断れないだろ。

ケイクくん：まあ、ユミちゃんに頼まれたら断りにくいけど……。

アキラくん：じゃ、いいよな。明日朝9時にユミン家に集合な。

ケイクくん：【 4 】

問題2 アキラくんは、ケイクくんが納得できないことを2つもしています。それはどん

なことですか。(納得=その通りだと思うこと)

問題3 もしあなたがケイクくんだったら、【4】の部分でどのような返事をしますか。

b. 実践概要

本実践の授業協力者は、単位制高校である神奈川県立鶴見総合高校の1~2年生である(授業者：同校の泉教諭)。外国に繋がる子どもが数を占め、普通科の日本人の学習者たちよりも日常の場でのコミュニケーションに困難を抱えていると思われる(その点に配慮して、教材では難解な漢字に振り仮名を付すようにした)。本研究の教材・実践の最大射程は中学生以上を想定しているので、授業対象者として適格であるが、例えば日本語母語話者の高校生を対象としたロールプレイ演習のようなスムーズな回答は難しいと考えられる。ただし、本研究の趣旨は本教材が幅広い校種・学齢における汎用性を有していることを確認することにあるので、学習の達成度ではなく、学習者たちが積極的に授業に参加しているかどうか、授業そのものがつまずきなく進行しているかどうかに着目した。

本実践は、以下のような概要で実施された。

日時・場所：2015年2月 「日本語」の授業の1時間(投げ込み教材扱い)

授業協力者：7人(「外国に繋がる子ども」を多数含む)

授業実践者：高校教諭2名(主授業実践者・授業補助者)、研究代表者(観察・記録)

授業時間：80分

c. 授業実践

まず、授業の導入部分で学習者たちがイメージを持ちやすいように、皆で話し合うことの意義、具体的にはこれまでの経験を例に考えて「お願いするとき」にどのようなことが重要であるのかを話し合った。意見が出しづらい場合には、授業実践者が例を追加したり、問い返しをしたりという支援を行ったので、学習者たちは具体的な問題点を比較的スムーズに挙げる事ができた。学習者たちから出た回答は板書して、皆で共有することにした。その結果、「問題のある会話例について意見を出し合う」と「問題のある会話例に対して、自分なりに適切だと思う表現を考える」は、比較的スムーズに行う事ができた。最後にロールプレイ課題を(2題)を実演し、皆で評価・検討した。なお、本時の課題を考えるとすぐに参照できるように、板書は授業終了までそのままにした。

学習者たちはロールプレイ演習は体験したことがなかった。その不足を補うため、授業実践者が「皆さんの実生活にストーリーはない」や「相手の反応を見て言い方を変える」のように、より具体的な指示を出した。また状況を把握しやすいように、小道具や位置関係等に配慮した(ここでは携帯電話での通話

なので、ペアが電話を持ち互いに距離を取って演習を行った)。学習者たちは、ロールプレイを非常に楽しげに行っていた。個別のロールプレイが一区切りしたところで、全員の前で再度演習を行わせた(相互評価や、自分のロールプレイを相対化する目的がある)。

d. 事後の検討

授業実践後に授業実践者らによって、以下のような内容が話し合われた。まず、本時の授業の総括として、先に着目すべき点として挙げた、学習者たちが積極的に授業に参加しているかどうか、授業そのものがつまずきなく進行しているかどうかについてであるが、初めての課題への取り組みということをお勧めしても、十分評価できる内容であった。次に、個別的な事項が話し合われ、次のように本実践での具体的な評価点が挙げられた。

- ・ロールプレイを授業に組み込むことで学習者たちの積極性は高くなる。
- ・本実践の教材・指導法は、高校生レベル(外国籍の生徒を含む)でも十分に実践可能である。
- ・授業後に学習者に感想を尋ねることによって、授業内容を振り返ると共に、今日の学習がどのような意味を持つのかを考えさせることができた。
- ・授業にロールプレイを組み込むことは、学習者達から概ね好評を得た。

さらに、次のように課題も指摘された。

- ・授業内容を次に繋げていくために、「今日初めて分かったこと」を個々で文章化する(アウトプット)必要がある。方法は要検討。
- ・学習者たちの事後の感想についておおむね好評だったが、その効果については、回数を積み重ねた後の学習者たちのコミュニケーション力や相手意識の変化を確認して検証する必要がある。

以上、残された課題について、授業実践者らと十分に協議の上、今後の実践時には適切な修正を行っていかなくてはならない。

(詳しくは宮城・泉 2015 を参照)

(4) 日常のコミュニケーションスキル教育の応用的研究：大学実践編

a. これまでの授業実践

本教材は研究代表者らによって、2011年～2014年で、以下の2校種4校で実践された。

- ・小山工業高等専門学校(国語表現：高専3年生)
- ・聖学院大学(言語学：大学2, 3年生)
- ・学習院女子大学(日本文化基礎演習：大学1～4年生)
- ・富山大学(日本語運用基礎論：大学2～4年生)

なお本教材は、演習形式にしたり、投げ込み教材として使用したりと若干の修正を加えて各校の授業形態に合わせて使用された。

b. 教材の改訂作業

各校での実践後、繰り返し検討を行い、設問の形式や構成等に相当の修正をほどこした。問題のある会話例については、受講した学生にありそうな会話であるか意見を求めながら、言葉遣いや応答の仕方等、問題のある会話例として、真実味がある内容に近づけるよう大幅な修正を行っている。

c. 授業実践

本研究では、最新の実践である2014年前期「日本語運用基礎論」(富山大学)をケーススタディとして取り上げる。授業の受講者と実施時期は以下の通りである。

受講者：富山大学 人間発達科学部の学生 2～4年生(45名)

実施時期：2014年4月～7月

スケジュール通りに全15回の授業実践を行った。毎時間、課題の内容に即したプリントを配布し、個人課題、グループ課題ともに記入欄を設け、そこに書き込む形式とした。また、受講者には、プリントに課題の回答以外にも、自由に書き込んでよいことを伝えた。

学生の書き込みから授業内容への取り組み方を考察する。作成者の許可を得て、以下に学習プリントの書き込み例を示す。下図3、4の【メモ①】、【メモ②】のように、問題のある会話例に傍線を引いたり、コメントを書き込んだり、授業者の授業内容への意見や気がついたことを欄外メモしている。

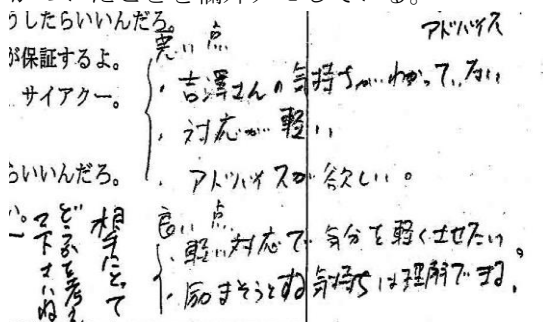


図3 「第8回 励ます」のメモ①

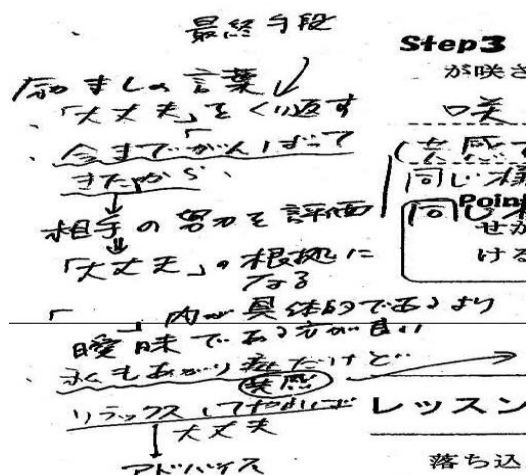


図4 「第8回 励ます」のメモ②

図 3.4 には、励まし方の方略や注意点等が、矢印や傍線等を使用して、整理されている。授業内容や話し合いの結果が自分なりのまとめとして記入されており、このような 1 例を取っても、このプリントが、設問に回答するだけの教材ではなく、備忘録を兼ねた学習のまとめとして活用されていることが確認できる。毎時間授業終了時にプリントを回収し、授業者が点検した後に返却するようにしている。その際、必要に応じて、コメントを返したり、課題を解決するための方略や分析についてのフォローアップインタビューを行っている。多くの学生がプリントをファイリングして、気になったところを見直したり、自らのメモを確認したりする等、ポートフォリオ的な使い方をしているようである。

d. 授業後の学生の変容

授業に対する学生たちの意見の述べ方や、ロールプレイでの発話や態度等、また、事後課題の内容を著者ら分析・整理した結果、全 15 回の授業が終了した後の学生のコミュニケーション力について技術や考え方に以下のような変容があったと考えられる。

① 発話形式レベルでの変容

授業を通して、またはグループやクラス全体での討議の中で、これまでの抽象的な指導に代わって状況に対応できる様々な具体的な表現を学習することができた。

② 発話意識レベルでの変容

問題のある会話例の考察や、ロールプレイ演習を繰り返すことによって、自然に配慮や察し等の聞き手意識をもつことができるようになった。

③ 会話の方略レベルでの変容

事後のレポート課題を作成することによって、会話全体を俯瞰的に見るメタ的な視点を経験し、コミュニケーションスキルを活用することによって、おぼろげながらも会話の展開をコントロールしようとする意識を持てるようになった。

これらの日常のコミュニケーションスキルが順調に熟達していけば、本研究の教材で課題として取り上げられなかった困難な状況に陥ったとしても、学生達が適切な応答ができるようになることが期待される。

(詳しくは宮城・文 2014 を参照)

(5) 本研究の今後の展望

本研究では「言語交流意識」を言語活動に対する理知的な捉え方や会話の方略に対する意識の萌芽、方略習得・改善への興味・関心、さらにもっとも本質的な言語活動への積極的な関与欲求を含む総体として捉えている。この前提から、本研究の中心的な課題は、学習者がコミュニケーションスキル学習を通してどのように言語交流意識を変容させていくか、言い換えれば当該課題への興味を喚起する方法を探るといえるものである。

今後本研究の実践について、受講者を対象

としたアンケート調査等を実施し、効果の測定を行う必要がある。現在、全 15 回で行われる実践の初回、中間回、全授業終了後の 3 回に分け、授業内容に関する選択回答方式の調査を行う準備を進めている。調査結果は追って報告する予定である。

また、本研究で開発された指導法と教材を HP 掲載や関連資料の配付によって、公開する予定である。併せて実践の記録また、既に発表した宮城 2013、宮城・文 2014、宮城・泉 2015 等の論考に実践の具体的な記録が示されているので、指導の参考になる。本指導法および教材は一応の完成を見ているが、今後大学他での実践を継続して、年次更新をしていく予定である。

<引用文献>

- 国立国語研究所、くろしお出版、言語行動における「配慮」の諸相、2006
宮城 信、道具の説明文に見る認知と表現の方略、表現研究、89 号、2009、11-20
宮城 信、故事成語学習の問題点とことばの意味の再構築、東京法令出版、月刊国語教育、7 月号、2010、78-81
森 篤嗣・牛頭 哲宏、ココ出版、小学生のための会話練習ワーク、2010
森山 卓郎、「断り」の方略、月刊言語、19 巻 8 号、1999、59-66

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① 宮城 信・泉 一彦、高大学連携学習によるコミュニケーションスキル教育の開発研究、教育実践研究、査読有、10 号、2015、97-112
- ② 宮城 信・文 智暎、大学におけるコミュニケーションスキル教育の開発研究、査読有、9 号、2014、1-11
- ③ 宮城 信、ロールプレイを応用した国語表現の授業—うまいアドバイスの仕方を考える、イマ×ココ、査読有、創刊号、34-39 [学会発表] (計 3 件)
- ① 宮城 信、コミュニケーションツールとしてのコトワザの表現価値、第 126 回全国大学国語教育学会名古屋大会(於：愛知県産業労働センター、2014 年 5 月 18 日)
- ② 宮城 信、コトワザの表現価値と教育、第 127 回全国大学国語教育学会筑波大会(於：筑波大学、2014 年 11 月 9 日)
- ③ 宮城 信、文体の慣用句、平成 26 年 富山大学国語教育学会(於：富山大学、2014 年 11 月 16 日)

6. 研究組織

- (1) 研究代表者 宮城 信(MIYAGI Shin)
富山大学・人間発達科学部・准教授
研究者番号：20534134
- (4) 研究協力者 泉 一彦(IZUMI Kazuhiko)
神奈川県立鶴見総合高校・国語科 総括教諭(2014 年度より研究協力者)